

エピローグ



1965年3月21日、公民権運動の活動家や支持者たちがセルマに集合したとき、地元の南部キリスト教指導者会議(SCLC)の指導者の一人ジェファソン・P・ロジャーズ師は、報道陣に、過激な活動家たちが「無責任な行動」を取れば、運動に大きな痛手を与えることになるかもしれない、と語った。ロジャーズ師が懸念した過激な活動家たちとは、学生非暴力調整委員会(SNCC)のことであった。SNCCの指導者たちは、マーティン・ルーサー・キングをはじめとする公民権運動主流派の漸進的な戦略にもどかしさを募らせていた。幅広い基盤を持つ社会運動は必ずと言っていいほどそうした緊張関係に直面するが、サーグッド・マーシャルやキングらの取った戦略が賢明であったことは、その後数十年間の展開によって証明される。

公民権運動の偉大な勝利は、法治国家においては、アフリカ系米国人の真の法的平等を公共施設、教育施設、そして何よりも投票所で確立することが、前進の鍵であったことを物語っている。

しかし、こうした真実は当時はまだ明らかではなかった。1966年5月までには、有権者登録運動のベテランであったストークリー・カーマイケルが、SNCCの新たな指導者としての地位を確立していた。カーマイケルはミシシッピ州グリーンウッドでの演説で、「ブラック・パワー」の蜂起を呼び掛けた。サーグッド・マーシャルやマーティン・ルーサー・キングが人種統合を追求したのに対し、カーマイケルは人種分離を求め、人種統合は「白人の優位を維持するための狡猾な口実である」と主張した。一方1966

年10月にカリフォルニア州オークランドでヒューイ・P・ニュートンとボビー・シールによって結成されたブラック・パンサー(黒豹)党は、「パンサー」と呼ばれる武装党員を使って、不当に黒人を標的にしたとされる警察官を尾行させた(ブラック・パンサーという名前は、アラバマ州での有権者登録運動で、読み書きのできない有権者のために使われた図案に由来するという説もある)。ブラック・パンサー党は、社会奉仕活動も行って一時的に人気を得たが、武装して地元警察と対立したために有力党員らが死亡したり拘禁されたりし、その暴力的なやり方は多くの米国民の支持を失い、党内の対立にもつなげた。ブラック・パンサー党は、多くの派閥に分裂し、互いに非難し合っ、やがて消滅していった。

現代では、今ここにいるわたしたちは皆、米国人である。

1968年は、西欧諸国では政治的激動の年となった。米国では、司法長官時代に時機を逃がさず公民権運動活動家を支援したロバート・F・ケネディ上院議員が暗殺された。そして、マーティン・ルーサー・キングの目覚ましい活躍が終わりを告げた。

晩年のキングが経済的平等を目指す活動に専念したということは、公民権運動が法的平等を獲得したという成果を示すひとつの指標である。1968年4月3日、キングは、テネシー州メンフィスで、ストライキ中の清掃作業員(主に黒人)を支援する活動をしていた。キングの最後の演説は、彼が生涯をかけて研究してきた聖書の教えを多く引用したものであった。その内容は、予言的とも言えた。

さて、これから何が起きるのか、わたしには分からない。この先、困難な日々が待っている。しかし、それはわたしには重要なことではない。わたしはすでに山の頂上に達したからだ。わたしは気にしていない。わたしも他の人々と同様、長い人生を生きたいと思っている。長い人生には意味がある。しかし、わたしは今、それを気にしてはいない。わたしが望むのは、神の意図するところを実行することだけだ。そして神は、わたしに山に登ることを許してくださった。そしてわたしは、そこから約束の地を見た。わたしは皆さんと共にそこにたどり着くことができないかもしれない。しかし、今晚、皆さんに知っておいてほしい。わたしたちは、ひとつの国民として、約束の地に到達する。今晚、わたしは本当に嬉しい。何も心配していない。誰をも恐れてはいない。わたしはこの目で主の到来の栄光を見たからだ。

その翌日、暗殺者の銃弾がキングの命を奪った。キングは39歳だった。監察医によると、長年にわたって大勢の人々の苦悩を背負ってきたキングの心臓は、60歳の人間の心臓のようだったという。葬儀にはおよそ30万人の国民が参列した。

マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの暗殺により、ワシントンDCをはじめ100



カ所を超える米国の都市で暴動が発生した。その時点では、洞察力に欠ける人や弱気な人は、キングの生涯の事業に疑問を持ったかもしれない。しかし、キングの語った約束の地は、1968年4月の怒りと炎に満ちた暴動の夜に人々が想像していたより、いろいろな形ではるかに間近に迫っていたのである。

公民権運動の勝利

アフリカ系米国人の歴史的な

体験は、これからも他に類のない例としてあり続けるだろう。しかし、投票権を保証する実質的に意味のある連邦法の施行によって、アフリカ系米国人は、移民やその他の少数集団が長年にわたってアメリカン・ドリームの追求と実現のために利用してきた手段を与えられた。米国では、投票をする者が真に政治的な力を持つ。投票権によって、また時の経過とともに、アフリカ系米国人の法的・政治的平等が、暮らしのほぼあらゆる

上 自分の家を持つことは、長年にわたって「アメリカン・ドリーム」の大きな要素となってきた。

左 友人のデニズ・マクネアが人種差別主義者に殺害されてから42年後、コンドリーザ・ライスは米国国務長官に就任した。

側面に向向上をもたらした。

例えば、ジョン・R・ルイスは、1961年にフリーダム・ライダーの一人としてモンゴメリーで暴徒に殴られ血まみれになった。今日ルイスは、ジョージア州第5選挙区を代表する連邦下院議員である。下院議員のうち50人近くがアフリカ系米国人であり、その中には有力な委員会の委員長として政治的に大きな力を持つ議員も数人いる。

1963年に、人種差別主義者の自警団員らがバーミングハムの16番通りバプテスト教会を爆破し、デニズ・マクネアら4人の少女が殺害された。2005年には、デニズの友人だったコンドリーザ・ライスは米国国務長官に就任し



大統領選挙の夜、当選が決まってシカゴの群衆に演説をするバラク・オバマ次期大統領。

た憲法である。

またオバマは大統領選に勝利した夜、次期大統領として、国民に次のように語った。

米国はあらゆることが可能な国だということをいまだに疑う人がいるなら、また建国の父たちの夢がこの時代にまだ生き続けているのかといまだに疑い、この国の民主主義の力をいまだに疑う人がいるなら、今晚こそがその人たちへの答えだ。

バラク・オバマの勝利は、この国の前進の度合いを示すひとつの尺度である。もうひとつの尺度、そして間違いなく最も重要な尺度は、特に米国の未来を築く若い国民の間で、奴隷制、人種隔離、およびそれによる不利な状況という恥ずべき歴史を過去のものとしなければならないという考え方が広く深く浸透し始めていることである。

た。

1966年以來、黒人の中等学校卒業率は3倍近く伸びており、同時に貧困率はおよそ半分に減少している。黒人の中流階級の台頭と、多くのアフリカ系米国人起業家、学者、文学者、芸術家などの成功は、社会的進展を物語るものとして広く知られている。

米国民は今も人種問題と闘っているが、これらは、サーグッド・マーシャルやマーティン・ルーサー・キング、そして公民権運動が取り組んだ問題とは大きく異なっている。今日の人種問題は、かつての人種問題に劣らず現実的な課題であるが、この何十年の間に達成された真の前進を反映した課題であることも事実である。

その一例として、「ブラウン対教育委員会」判決の主題であった教育の問題が挙げられる。最近の連邦最高裁判所の判決では、「アファーマティブ・

アクション(積極的差別是正措置)」の許容限度が検討されている。アファーマティブ・アクションとは、過去の差別を是正し、公共機関がその対象地域の人口構成を正しく反映することを義務付け、また奨励する政策である。

今日では裁判官は、例えば、親が子どもの学校を選べる学区において、こうした政策と対立する要求を解決しなければならなくなっている。特定の学校を選ぶ親が多すぎれば、一部の子どもたちしか第1志望校に通えなくなる。その場合、その学区は、「決定的な条件」として人種を考慮し、その人気校の人種の均衡を保つような人選をすることが許されるのか、という点が争点となる。

リンダ・ブラウンの時代のように何百万人ものアフリカ系米国人生徒が故意に隔離され、古い劣等な学校に通わされていた時代とは異なり、今日の新たな住宅地区別の人種

分布によって学校が実質的に人種隔離されている場合、政府が干渉すべきなのだろうか。

こうした問題をめぐって、あらゆる層の米国民が異議を唱えることができるし、実際に意見を戦わせている。そして、こうしたジレンマに答えを出すことのできる米国の指導者は少ない。

本誌(英語版)の印刷時点で、ケニア出身の黒人男性とカンザス州出身の白人女性の息子であるバラク・オバマが、米国の次期大統領に選ばれている。オバマは、人種について語った選挙演説で、次のように述べた。

奴隷制に関する問題への答えはすでに合衆国憲法に含まれている。それは、法の下での平等な市民権を中核とする憲法であり、国民に自由と正義を約束し、また時とともに完ぺきとなり得る、そして完ぺきとなるべき連邦を約束し